

津波被害の気仙沼「男山本店」

日本有数の水揚げを誇ると、船が建物に衝突して 原昭彦さん(右)は話す。 気仙沼港。風光明媚で 柱を折り、つぶれたよう 大正元(一九一二年) 知られる湾内の姿は跡形 だ」と男山本店社長の菅 創業の蔵元の五代目。津 もなく、がれきが積み重 なり、巨大な石油タンク が転がっていた。砂塵が 舞い、焼けこげた漁船が 岸に衝突したまま。沿 岸に目を転じると、「男 山」という金文字が輝く 看板が目に入った。 男山本店の社屋だ。 昭和初期の洋風建築で、築 八十年の国の登録有形文 化財。だが、優雅な飾り 柱が独特の雰囲気醸し 出す建物をよく見ると、 一、二階部分が消えて三 階だけになっていた。 「目撃した人に聞く

「貯蔵タンクも傾いたが、ぎりぎり津波の被害を免れた」と話す菅原昭彦社長(いずれも宮城県気仙沼市で



酒造りの最中に東日本大震災に見舞われた蔵元は多い。宮城県気仙沼市の老舗「男山本店」もその一つだ。幸い清酒になる前の「もろみ」のタンクが生き残り、新酒を完成させ、営業を再開した。その喜びの半面、被災の影響で出荷もままならぬ厳しい現実を直面する。「気仙沼復興の希望になりたい」との思いを支えに、綱渡りで操業を続ける酒蔵を訪ねた。

(出田阿生)

酒蔵に亀裂、タンク傾く

波の濁流は山を駆け上り、約二百メートル離れた高台の酒蔵に迫ったが、わずかに数分前で止まった。十一人の従業員も被災した。家族や自宅を失った人もいる。「こんなときに酒なんて」。今春の新酒をあきらめかけた菅原さんを後押ししたのには、地元や全国からの支援の輪があった。

「いわゆる明日なき注文の殺到ですよ」と今、菅原さんは泣き笑いのような表情を浮かべる。三月下旬の製造再開後、全国各地から「津波を生き延びた酒を買いたい」「支援のために購入したい」という注文が殺到。ところが、資材倉庫が被災して梱包材が不足し、思うように出荷できない状況が続いている。流された事務所の代わり、酒蔵で仕込み期間中に寝泊まりする建物の会議室を使う。発注の伝



揺れが収まって様子見していると、ザーッと押し寄せる波の音がした。外を見ると、バーンという音がして家がどんどん流されていた。酒蔵の駐車場から波が引くの待ち、仲間とワゴン車に乗って山に逃げた。車窓から、夜の闇に港が真っ赤に浮かんで見えた。降りしきる雪。燃えながら動く船が、岸にぶつかると、そのたびに火の手が上がった。

「二日後」などと書かれた段ボール箱に仕分けしている。在庫データの入ったパソコンは流された。事務作業も普段の三倍以上の時間がかかる。そんな中、ひっきりなしに注文の電話が入る。「プシュプシュ」

「それでも、酒は無事だったんです」と従業員は武田行広さん(三三)が、酒蔵に戻ると、壁に亀裂が入り、タンクが傾くなどの被害が出ていた。しかし、昨年十一月から仕込んできた「もろみ」のタンク二本、計三千リットルは無傷だった。三月に入ってから発酵を始めていた。耳を澄ますと、タンクの中から「プシュプシュ」と音を立ててもろみの発酵する音が聞こえた。「生きてる」と思った。

特報 TOKU HOJ

新酒希望の

滴

もろみは耐えた

酒を造るには、発酵のタイミングを見計らい、もろみは機械で搾らない。選別機は、すると知人が他の施設で使っていた大型発電機を貸してくれた。重い機を運んでくれた。重たいという思いがわき上がった。杜氏の鎌田勝平さん(六六)が「やろ」と心えた。

菅原さんの胸に「このもろみは希望だ。酒にしたい」という思いがわき上がった。杜氏の鎌田勝平さん(六六)が「やろ」と心えた。鎌田さんは、岩手の杜氏集団「南部杜氏」のベテラン。「飯は堅め。夜は晩酌少しと、熱いお茶を飲む」という習慣を震災翌日から再開した。「すごいことに、生活リズムを絶対に変えない。七輪と鍋で米を炊く妻は『堅く炊けるだろっか』と緊張しっぱなしだった」と菅原さん。

地元の人は口々に「気仙沼の復興の先頭に立ってくれ」と言った。男山本店が造る酒は、伝統的な銘柄「伏見男一」に新しい新銘柄が人気を



次々と瓶詰めされていく「蒼天伝」

会議で、菅原さんは従業員にハッパを掛ける。「一人でも『やれねえ』とか『できねえ』とか思っている注文はみなさんの応援。単純に『酒が飲みたいよ。来月のことも予測できない。いまがんばらねえと、先はない。みんながパニックになりながら仕事も残った。その務めを果たさなさいいけない」

集め、若い職人たちの技術が向上してきた直後に津波が襲いかかった。激励の声が続々 東京や仙台にも卸してはいたが、売り上げの七割強は地元の酒屋や飲食店。そのお得意さんの八割が被災した。いま殺到している注文は全国各地が中心で、今まで取引が中心で、今まで取引が先にも注文が来るか、共同購入に賛成してくれました。北海道から沖縄まで、全国からのメッセージが並ぶ。

菅原さんは感謝を込めてこう誓った。「今入った注文はみなさんの応援。単純に『酒が飲みたいよ。来月のことも予測できない。いまがんばらねえと、先はない。みんながパニックになりながら仕事も残った。その務めを果たさなさいいけない」



国の登録有形文化財だった男山本店の建物。1、2階が倒壊し、3階だけが残った

停電、断水を克服 停電で電気が止まり、水道も出ない。発酵しすぎないように冷やすため、井戸水を使った。震災後、気温が低下したのも幸いした。酒を搾る機械を動かすにも電気が必要

全国から注文、営業再開